

板付周辺遺跡調査報告書

第25集

—板付遺跡 第68次調査—

2002

福岡市教育委員会

序

福岡市は古くから、大陸における様々な東アジア文化を受ける窓口として栄えてきました。人・物の交流は盛んで、その結果多くの文化的遺産が培われ、今日に至っています。これらかけがえのない遺産を保護するという立場から、福岡市教育委員会では、開発に伴い失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を行ない、記録保存という形で、往時のありさまを後世に伝えています。

本書は平成12年度に行ないました板付遺跡第68次調査の成果について報告するものです。この調査では特に、弥生時代の墓3基を検出するなど、弥生時代における墓域の更なる広がりを確認することができました。今回調査による遺構・遺物の数々は、この地域における歴史を考える上で、重要な手がかりとなるでしょう。

この書が、市民の皆様の埋蔵文化財、ひいては地域の歴史に対する御理解の一助となり、また考古学上、地域史上の研究資料として御活用戴ければ幸いです。

最後になりましたが、今回の調査において費用の負担をはじめとする御協力を戴きました株式会社サンエイシステム、ならびに地元の方々をはじめとする関係各位に厚く感謝申し上げます。

平成14年3月29日

福岡市教育委員会

教育長 生田征生

例　　言

- ・本書は福岡市教育委員会が2000年11月20日から12月12日にかけて行なった、板付遺跡第68次調査の報告である。調査は藏富士 寛が担当した。
- ・本書使用の標高は海拔高。方位は磁北である。
- ・本書の執筆・編集は藏富士が行なった。
- ・本書に関わる資料はこの後、福岡市内蔵文化財センターに収蔵される予定である。

目 次

はじめに.....	1
1. 調査に至る経緯.....	1
2. 調査の組織.....	1
I 位置と環境.....	2
II 調査の記録.....	4
1. 遺跡の概要.....	4
2. 遺構・遺物.....	5
(1) 土壙墓.....	5
(2) 溝.....	7
(3) ピット群.....	9
(4) その他の遺物.....	9
まとめ.....	10

挿 図 目 次

図1 板付遺跡第50次・第68次調査 (1/400)	2
図2 位置 (1/25.000)	3
図3 周辺地形 (1/5.000)	3
図4 層序 (1/20)	4
図5 遺構配置 (1/80)	4
図6 土壙墓 (1/60)	5
図7 土壙墓出土遺物 (1/3)	6
図8 溝 (1/40, 1/60)	7
図9 溝1出土遺物 (1/3)	8
図10 溝6～8出土遺物 (1/3)	9
図11 その他の遺物 (1/3)	9

図 版 目 次

図版1 調査区南半 (北から) 調査区北半(1) (南から) 調査区北半(2) (南西から)	図版3 土壙墓1 (南東から) 土壙墓2 (北西から) 土壙墓3 (北東から)
図版2 溝全景 (南から) 溝1土層 (北西から) 溝2土層 (南東から)	図版4 土壙墓1完掘 (北西から) 土壙墓2完掘 (北西から) 土壙墓3完掘 (北東から)

はじめに

1. 調査に至る経緯

平成12年10月2日、株式会社サンエイシステムより、博多区板付2丁目9番8における事務所建築に関して、埋蔵文化財事前審査申請書が提出された。これを見て、福岡市教育委員会埋蔵文化財課では平成12年11月2日に試掘調査を行ない、遺跡の存在を確認した。その後、両者による協議を行ったが、建築予定建物ではどうしても遺構面まで、建築の影響が及ぶことが避けられないことが明らかとなつた。そこで、記録保存のための埋蔵文化財発掘調査を行うこととなり、2000年11月20日より、調査を開始した。

2. 調査の組織

調査は、以下に示す組織で実施した。

調査委託 株式会社サンエイシステム

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 文化財部埋蔵文化財課 課長 山崎純男 調査第1係長 山口譲治

事前審査 埋蔵文化財課 事前審査係長 田中寿夫 加藤隆也 大塚紀宣

庶務担当 宮川英彦

調査担当 藏富士 寛

調査作業 加島定次郎 高瀬孝二郎 矢野和江 横尾泰広 脇坂信重 脇坂チカ

整理作業 柴田加津子 萩本恵子 日名子節子

遺跡調査番号	0051		遺 跡 略 号		ITZ68
地 番	博多区板付2-9-8		分布地図記号		板付24
開 発 面 積	203m ²	調査対象面積	100m ²	調 査 面 積	54m ²
調 査 期 間	2000.11.20～2000.12.12				

I 位置と環境

板付遺跡は、福岡平野のほぼ中央に位置する遺跡で、東の御笠川、西の諸岡川に挟まれた台地上に営まれる(図2)。1951年から4年間に渡って行なわれた、日本考古学協会による調査は、周囲を取り巻く環濠の存在、刻目突帯文と板付I式土器の共伴するという事実、炭化米や耕圧痕の残った土器の検出など多くの成果を挙げ、板付遺跡は稲作の行なわれた最古の農村として、広く知られるようになった。1976年には、国史跡として指定されている。

このように学史に著名な板付遺跡も、周辺地域の開発が進み、その度に緊急調査が行なわれてきた。板付遺跡の調査は、今回の調査で68次を数えることになる。今次調査地点は環濠集落のある、いわゆる中央台地の北西端部に位置し、西側に隣接して第60次調査が行なわれており(図1・3)、第60次調査では、弥生時代前期の住居、掘立柱建物、上墳墓等が検出されている(二宮編1995)。今次調査の対象面積は極めて小規模であったが、この調査における遺構の広がりをみると上でも注目される。

二宮忠司編1995『環濠整備遺構跡認調査 板付遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第401集



図1 板付遺跡第60次・第68次調査(1/400)



図2 位置 (1/25,000)

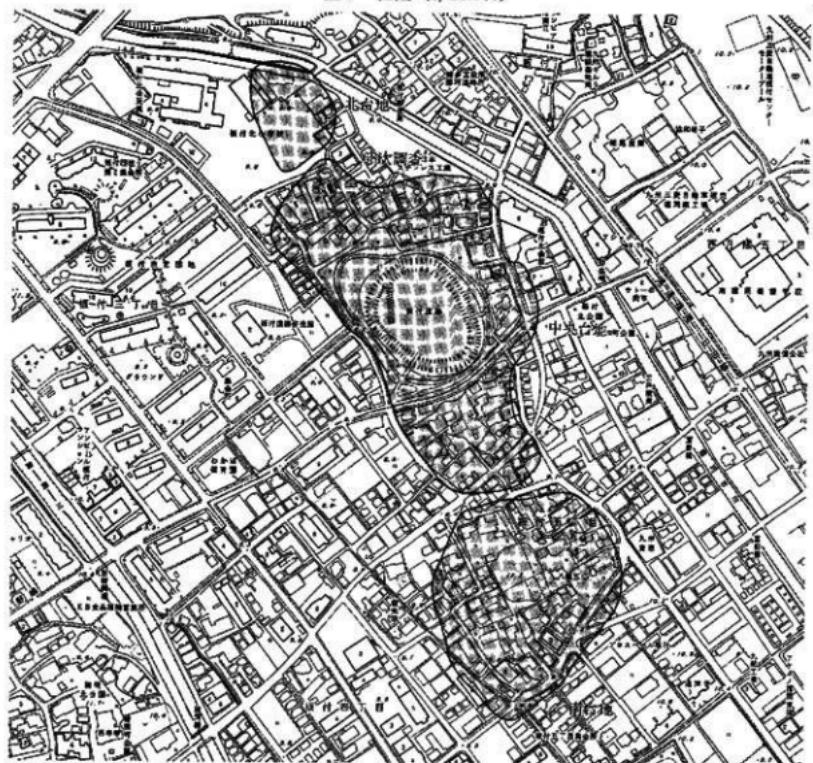


図3 周辺地形 (1/5,000)

II 調査の記録

1. 遺跡の概要

板付第68次調査区は、福岡市博多区板付2-9-8にあり、調査面積は54m²である。排土置場の関係から、まず、南側半分の調査を行ない、終了の後、土砂を反転し、北側半分の調査を行なった。調査期間は2000年11月20日から2000年12月12日である。

今次調査区における層序は図4の通り。現地表(9.5m)から80cmの客土があり、更に50cm程の水田耕作土が続く。この下に数cmの遺物包含層が薄く堆積しており、遺物包含層下のいわゆる八女粘土上で遺構を検出した。遺構面は標高8.2mほどである。

遺構の内容としては、土壤墓3、溝6、ピット群と、時代的には弥生時代前期～中世に至るまでの遺構が検出できた(図5)。特に土壤墓が検出されたことは、近接して行なわれた第60回調査の所見と照らし合わせても興味深いものであるといえよう。調査区の北東端には、遺構状の落ち込みが認められるが、調査区外へと続いていること、詳細は不明である。

調査面積に比例して、出土遺物も少なく、コンテナ3箱ほどである。溝1から出土した遺物や包含層中に含まれていた遺物が目立ち、それ以外の遺構出土の遺物は少ない。

以下では、今次調査において検出された遺構、そして遺物についてその所見を述べることにしたい。



図4 層序 (1/20)

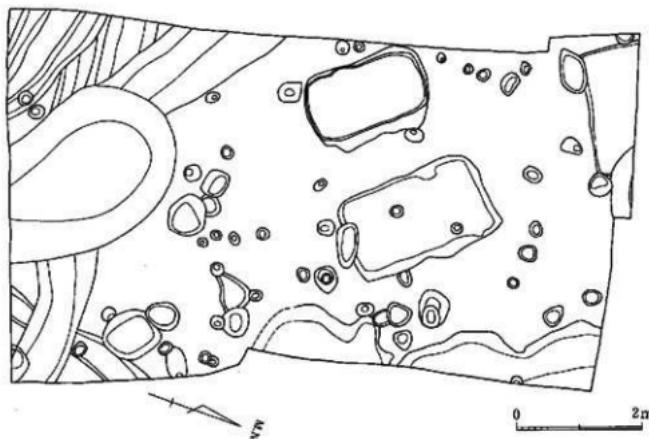


図5 遺構配置 (1/80)

2. 遺構・遺物

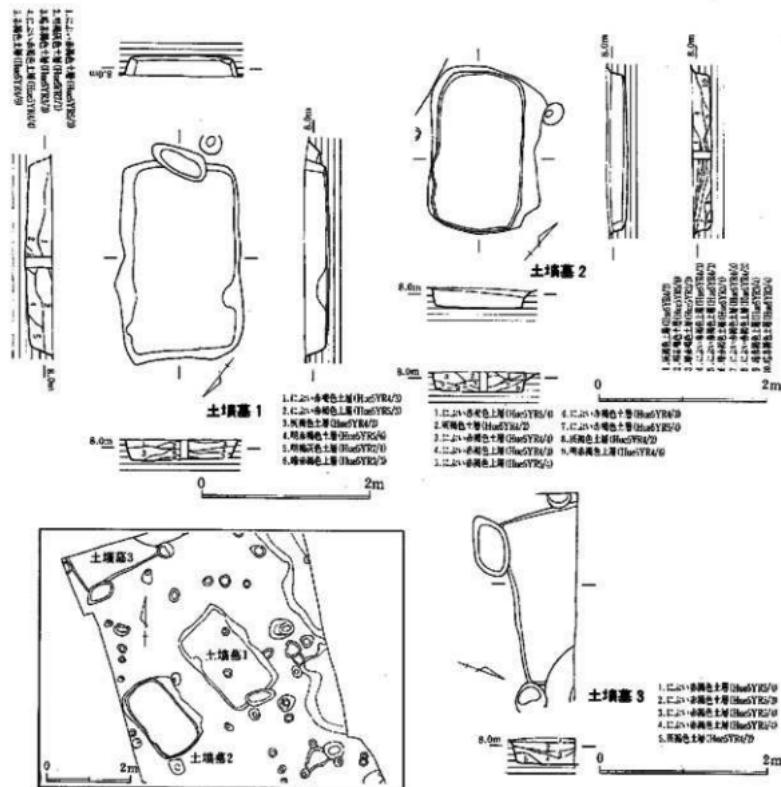
(1) 土壙墓

土壙墓は3基検出できた(図6)。2基が調査区の中央に、他の1基は調査区の北側存在する。北側の1基は、調査区外へと続いており、完掘には至っていない。中央の2基は主軸を北西—南東方向に、北側の1基は、それに直交する主軸方向を取っている。

これら「土坑」を墓と判断した理由について、

- 1) おそらく3基とも取っていたであろう、長方形という平面プランと、立ちあがりのしっかりとした掘り方を有していること
- 2) 2基の「土坑」が軸をほぼ等しくし、近接して存在するなど、配列に規則性が認められること
- 3) 第60次調査における所見

以上の3点を挙げることができる。出土遺物は少なく、供献土器など、土壙墓自体に伴う遺物は認められない。それぞれの土壙墓に1~3の番号を付し(図6)、以下に所見を述べる。



土壙墓 1

調査区の中央に位置する土壙墓で、長さ2.4m、幅1.4mの長方形を呈し、深さ30cmを測る。主軸の方向はN-38°-Wに取る。掘り方の一部をピットに切られる。各壁の立ちあがりはしっかりしており、底面は平坦である。

出土遺物（図7-1）

土器片の出土を数点みるのみである。いずれの土器も埋土内に含まれていたもので、土壙墓自体に伴うものではない。図化に堪えるもののみ取り上げることにし、以下に所見を述べる。

1は壺の肩部片である。肩部がわずかに屈曲し、浅い沈線が巡る。表面の剥落が激しく、器面調整は不明。

土壙墓 2

調査区中央の南西よりに位置する土壙墓で、土壙墓1とは70cm程しか離れておらず、南西隣に並びあっている。長さ1.9m、幅1.0mのやや隅丸の長方形を呈し、深さ25cmを測る。今次調査における他の土壙墓より、やや小形である。各壁の立ちあがりはしっかりしており、ほぼ垂直に近い。底面は平坦である。主軸の方向はN-42°-Wに取る、土壙墓1の主軸にほぼ近い。近接する土壙墓1とは並列しているといえ、その関係が注目される。

出土遺物（図7-2・3）

土器片が数点出土した他、石器が1点出土している。いずれの遺物も埋土内に含まれていたもので、土壙墓自体に伴うものではない。図化に堪えるもののみ取り上げることにし、以下に所見を述べる。

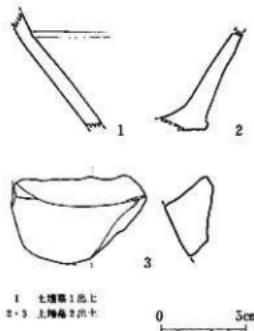
2は土器底部片である。底部側面がくびれ、端部は外方へわずかに張り出す。表面の剥落が激しく、器面調整は不明。3は磨製石斧の刃部片である。全体の摩滅は激しい。

土壙墓 3

調査区の北側に位置する土壙墓で、一部が調査区外へ延びており、掘り方も所々ピットに切られている。検出した状態では、長さ2.0m、幅1.0 (+α)m、深さ30cmを測る。これを土壙墓であるとすれば、その幅は1mを大幅に越えるものとは考えにくく、規模の点から考えれば、土壙墓3は土壙墓1とほぼ等しいものであったのだろう。各壁の立ちあがりはしっかりしており、ほぼ垂直に近く、平面形をみれば、他の土壙墓に比して、各辺も直線的で隅角もしっかりとしている。底面は平坦。主軸の方向はN-58°-Eで、土壙墓1・2とは直交する軸線を取る。

出土遺物

土器片の出土を数点みるのみである。いずれも図化に堪えない細片。いずれの土器も埋土内に含まれていたもので、土壙墓自体に伴うものではない。



1 土壙墓1出土
2・3 土壙墓2出土 0 5cm

図7 土壙墓出土遺物(1/3)

(2) 溝

調査区南側に集中して、計8本の溝が検出できた(図8)。順に1~8までの番号を付したが、後に述べるように、溝3と溝7は同一のものであると考えられ、したがって、溝の本数は7本となる。溝1・2を除けば、いずれの溝もごく浅いものである。溝1・2を除き、いずれの溝も埋土は暗赤褐色を呈している。また、出土遺物も溝1出土のものを除けば、少量に留まる。以下では、溝そして出土遺物の所見を記す。

溝1

溝の埋土、切り合い等を考慮すれば、この溝1がこれら溝の中で最も新しいものである。溝の幅は2.0~2.2mで、深さは55cmを測る。そして、調査区内では、長さ3m程が確認でき、南側の調査区外へと延びている。溝の幅は中央付近が最大となり、南側へ向かうにつれて、次第に狭くなる。底部は比較的平坦であるが、各壁は緩やかな立ちあがりとなる。溝の埋土は水分を多く含み、多くはきめの細かいシルト質土で、2・5・7層のような黒色土層の存在は、この溝が滯水していたことを示している。

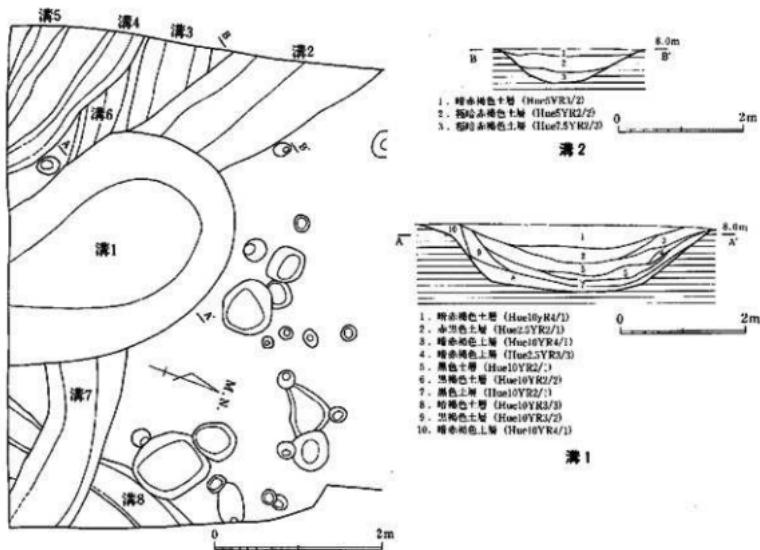


図8 溝 (1/40, 1/60)

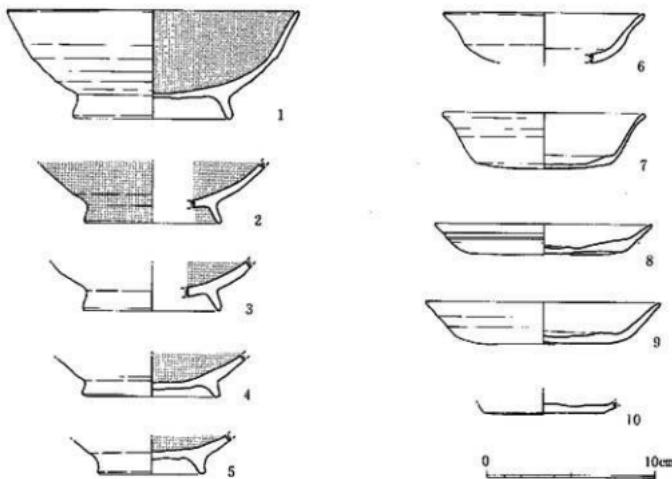


図9 溝1出土遺物(1/3)

溝1出土遺物(図9)

溝1は本次調査では最大の溝であり、多くの遺物の出土をみた。特に黒色を呈する2~7層から出土する遺物が大半を占める。

図9は溝1における黒色土層出土の土器である。1は黒色土器A類の椀で、ハの字に開く高台を有する。杯部は丸みを帯び、外面下半にはヘラケズリを施す。口径(復元)17.1cm、高台径9.1cmを測る。2は黒色土器B類の椀である。ハの字に開く高台を有する。高台径(復元)7.9cmを測る。3・4・5は黒色土器A類の椀である。3は高台径(復元)8.0cm、4は高台径(復元)7.7cm、5は高台径8.0cmをそれぞれ測る。6・7は土師器杯である。6は口径(復元)11.7cm、7は口径(復元)11.8cmを測る。7は底部ヘラ切り。8~10は土師皿である。8は口径12.8cmを測る。外器面には、らせん状に沈線が巡る。底部はヘラ切り。9は口径(復元)13.9cmを測る。外器面は回転ナデ調整。10は底部のみ残る。ヘラ切り。

溝2

調査区南側を北西-南東方向に走る溝で、溝3を切り込み、その南東側を溝1に切られる。幅1~1.2m程を測り、深さは30cmである。溝の立ちあがりは緩やか。

溝3(溝7)

東西方向に走る溝で、溝2に切り込まれ、更にその上を溝1に切られる。幅80cm、深さは10cm程である。溝の走る方向、埋上、そして溝の規模を考えれば、溝3は溝7へとつながるもの、つまり溝3と7は同じ溝として把握できるだろう。溝7は調査区南東側にある溝で、幅80cm、深さ5~10cmを測る。ピットを一つ切り込んでいる。

溝4

溝4は溝3の南側を北西—南東方向に走る溝で、幅30~40cm、深さ5cmを測る。溝6やピットを1つ切っている。

溝5

溝5は溝4の南側、調査区の南西側に位置する溝で、溝4とはほぼ同規模。

溝6

溝6は溝3の南側に位置する溝で、西側を溝4に、東側を溝1に切られる。幅40m、深さ5~10cmを測り、溝4・5とはほぼ同規模。溝6の遺存した部分は溝3の流れと平行しているが、更に東側における流れの向きは不明。おそらく溝1により、削り取られているのであろう。

溝8

溝8は調査区南東側に南北方向に流れる溝で、溝7(1・3)に切られている。この溝のみ、走る方向が他の溝と若干異なる。幅40~50cmを測り、深さは10~20cm程である。

溝2~8出土遺物(図10)

溝2~8から出土した遺物は少ない。ここでは、各溝出土の土器を一括し図化に堪えるものを挙げ、その所見を記す。

1は溝6出土の弥生土器口縁部である。「く」の字に折れ、端部が水平近く張り出している。2は溝6出土の土師皿である。底部はヘラ切り。3・4は溝7より出土したものである。3は弥生土器の口縁部である。「く」の字に折れ曲がり、内面側は欠損しているが、わずかに張り出しがあったのだろう。4は弥生土器底部片。平底である。5は溝8より出土したもので、底径7.9cmを測る。底部はわずかに上底気味である。

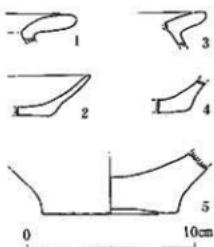


図10 溝6~8出土遺物(1/3)

(3) ピット群

調査区内には多くのピットが存在する。いずれも埋土は暗赤褐色土を主体とする。土器などがわずかに出土するのみであり、時期の決め手に欠ける。ピット同士でも切り合いがあり、他の造構との切り合いもまちまちで、ピット自体、複数の時期に渡るものであろう。ただ、全体的にみれば(例外もあるが)、土壤基を切りこみ、溝に切られるという傾向を窺うことができる。包含層等からは弥生時代中期後半の土器が数多く出土しており、小片のためすべての図化は行なっていないが、ピット出土の遺物もこの時期のものが多い。このことは先に挙げた切り合い関係からみても矛盾するものではなく、これらのピットは、多くが弥生時代中期後半に属するものである可能性が高いであろう。

(4) その他の遺物(図11)

造構面(八女粘土)上には薄く遺物包含層があり、いくらく土器等の出土をみた。ここでは図化に堪えるものを挙げ、その所見を記すこととする。

1は土師器碗である。杯部はやや直線的に開き、「ハ」の字に開く高台を有する。口径(復元)12.2cmを測る。2は弥生土器底部である。底径10.6cmを測り、わずかに上げ底気味である。外器面にはハケ目調整を施す。

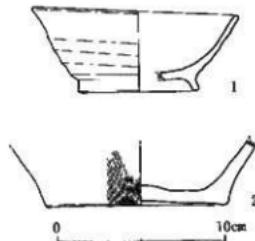


図11 その他の遺物(1/3)

まとめ

ここでは第68次調査の成果について、その特記事項を挙げ、まとめに代えたい。

溝について

今次調査では調査区の南側に多くの溝を検出できた。総じて遺物の出土量は少ないが、溝1は比較的多くの遺物が出土した(図9)。その遺物は時期的にややばらつきもみられるが、おおむね10世紀後半の時期に収まるものであろう。その他の溝は出土遺物からはその時期を決めがたい。

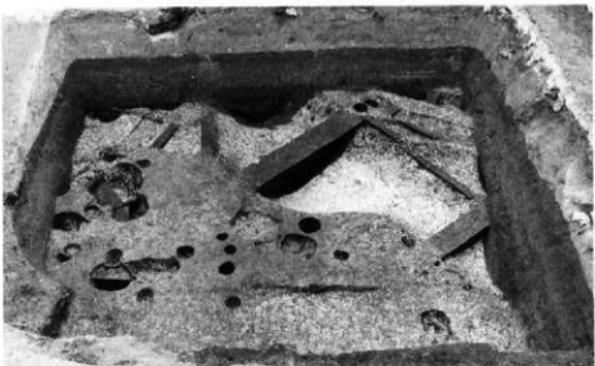
第60次調査において多くの溝を検出しており、その配置をみれば(図1)、SD-01は溝2に、SD-03は溝3・7に、SD-02は溝5につながる可能性が高い。今回の調査所見では溝1が最も新しく位置づけられるが、第60次調査時にはSD-01からIV類の白磁が出土したとの報告があり、溝1・2は更に新しく考える必要があるのかもしれない。溝6からは土師皿、SD-02、つまり溝5からは土師器碗が出土しており、溝4~6はいずれも中世の溝であろう。

また、第60次調査では、SD-03は弥生時代中期の造構として報告されている。これとつながる溝3・7においても、該期の土器のみが出土しており、溝3・7・8だけは弥生時代中期の溝である可能性がある。

土壙墓について

今次調査においては、土壙墓を3基検出した。木棺等を伴っていた可能性も十分考えられるが、上層観察の上では、その明確な痕跡をみるとことはできなかった。出土した土器は埋土に含まれていたもので、いずれも小片であり、時期の比定は困難である。近接した60次調査地点では、24基の土壙墓が検出されているが(二宮編1995)、その分布のあり方、形態をみても今次調査の3基が「墓」であると判断しても良いだろう。今次調査において更なる墓域の広がりを確認できたことは、大きな成果であるといえる。

調査区南半
(北から)



調査区北半(1)
(南から)



調査区北半(2)
(南西から)



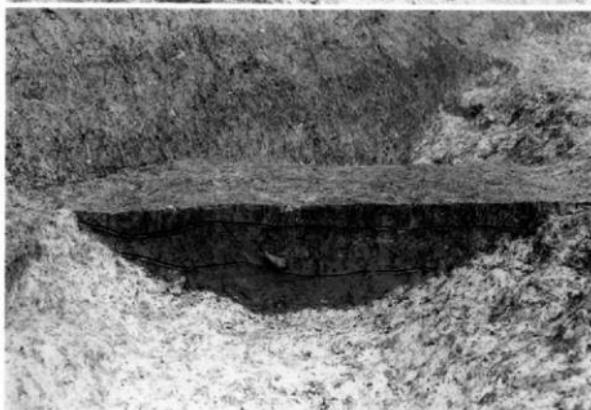
図版 2



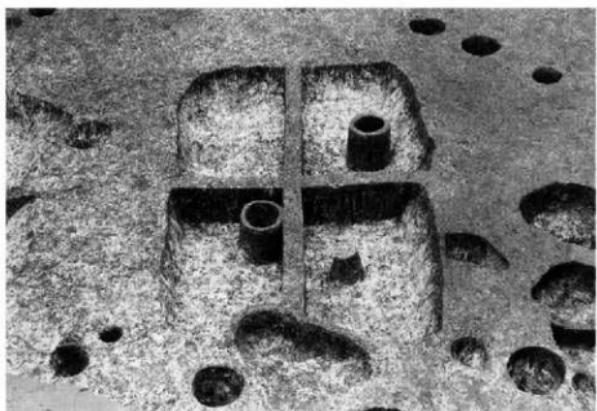
溝全景（南から）



溝1土層（北西から）



溝2土層（南東から）



土壤墓 1 (南東から)

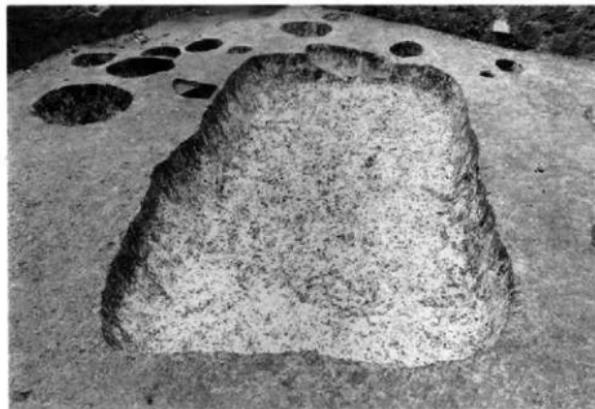


土壤墓 2 (北西から)

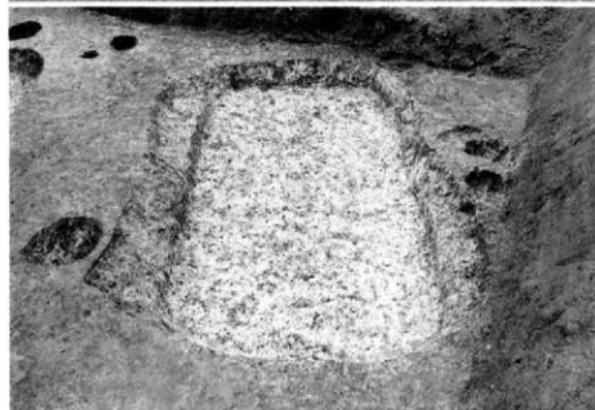


土壤墓 3 (北東から)

図版 4



土壤墓 1 完掘
(北西から)



土壤墓 2 完掘
(北西から)



土壤墓 3 完掘
(北東から)

福岡市
板付周辺遺跡調査報告書第25集

—福岡市埋蔵文化財調査報告書第718集—

2002年（平成14年）3月29日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8番1号

印刷 佛三協舍印刷所
福岡市東区箱崎5丁目6-40

